

# イヌの新しい進化を想定する

小原 秀雄 (女子栄養大学名誉教授)

私とイヌとの関わりは、経験的なものより知識的なものだ。たまたま、K・ローレンツの「人イヌに会う」(至誠堂)を訳出して以来である、と言ってもよい。その後ニホンオオカミについて、70年頃に著述し、その所論の中で、イヌとオオカミとの関わりに触れたりもした。

実は今回、改めてイヌについて触れてみたいと思うのは、テレビや新聞で、チンパンジーが自動販売機使用、の報道があったからである。大学を定年になってから、報道を読んだり聴取する時間が少し増え、たこともあり、誤りに怒ったり、私の著作から引用したりとしか思えぬのに、得々としぎりしてコメントする「動物学者」などうんざりしたりしている。今回もチンパンジーは視覚の動物であり、必要に応じて見まねをするのは、その性質から当然である。「手を使える」から自販機を使えるのに、過ぎない。自販機でなくとも、なにかすれば餌なり欲しいものが出てくるならば、やろうとするのは、哺乳類なら全ても思える。人間のようにやれないのは、「手を使う」動物でないからである。そこで私は、イヌについて一言いって「モノ申す」の思立(テレビなどについたら「モノ申す」の思立。もう少しヒマになったら、多少を見聞かして見ている。今は実はチャンネル切り換えのとき、チラと見るぐらいで、いい加減な解釈や作りしっかりとコメントする機会を持っていないからである。)

イヌについて語り思い立ったのは、イヌが人間(ヒト)との種間関係で長い歴史を経た上、人間が作り出した。人間はイヌの品種を作り出すこと、つまり新しい形態だけにかかわっている。これはしかし人為淘汰(選択)である。

動物系統学上、ヒトに近縁な点もあり、サル類中心の動物の行動は、人間には理解しやすい。さらに日本での歴史的(今西錦司という偉大なリーダーがいた)もあって、サル学もサル学者も日本では盛んである。

イルカやゾウ、もちろんイヌやネコも心理学的研究もあって、共に知能は高いとみられるようになった。しかしイルカは水棲で聴覚中心(水中のエコロケーションに当たるソナーを使う)であり、イヌとゾウは嗅覚が優れているので、人間には理解されにくい。それにイルカやゾウは基本は野生動物である。

ところでイヌはまたゾウとはちがって人間と一体化した特殊な家畜であり、その歴

史が最も長い種である。イヌが人間の用途や愛玩のために、様々な品種を人為的に分化して作られたことは言うまでもないが、それとは別に人間との間に「愛」に基づくといわれるような、特殊な相互関係を成している。それをどのよるにみずから、私達の想定が根拠づけられる。つまり、特殊な共生関係であり、相互進化とよばれる法則性に基づいた歴史的变化が起こっているはずである。人工的・社会的な条件下に形成された品種という形態的变化(イヌからみれば適応)とは別に、心理的・精神的側面を問題にしたいのである。寄生種と宿主、花と昆虫といった相互適応は、進化の仕組みの一つとみなされている。この点についての問題や解釈はおくとして、このような実態が捕食者と被食者との相互関係のように野生種間のもではなく、またふつうの家畜のように、人間による一方的な利用だけではないところに、イヌとヒトとの関係の特殊性がある。

イヌが自動車の往來を見ながら高速道路すら渡るのを見たり、盲導犬の働きなどかみれば、都市に代表される人工環境に積極的に適応してもいる。家ネズミ類の特殊性に似た環境適応をし、しかも人間と密着している。



イヌはきわめて知能的だが、だからヒトとの相互関係が生まれているのではない。長い共生・共存関係と、人間が作り出す環境の中で生活するという点から、人間の気持ちを読みとるとか、人間の行動に適応した行動をするといった行動では、これほど優れた動物はいないといいたいのである。つまり、チンパンジーは野生動物であり、一方、イヌは少なくとも1万年以上ヒトと相互関係の下で生きて来た。この関係に適応している。しかし、その適応結果が、品種改良の社会的な淘汰圧でまた変化しているので、余り、いやほとんど目につけていないのである。さらにイヌの人間に対する行動は、個々のイヌと人間の関係によって個別的に特定化している可能性がある。イヌの行動・心理的適応能力は相当に幅広いと考えられる。

動物学的あるいは科学的には、これ以上話すことはできない。イヌに関する人間側からの本はたくさんあり、イヌの立場からという学者の著作もある。推薦した本もある。けれども、これら著作のどれにも、イヌが人間の生活環境の中で、生活環境が自然界では到底考えられない質と量、そして何よりも劇的なスピードで変化している中で、どう社会的に淘汰されているか、あるいは淘汰を受けていないかの研究、されてはいない。たとえば警察犬や牧羊犬といったように、人間社会の変化との対応で品種分化したのが、その一つの適応形態となっておりともいえる。愛玩用のイヌの品種出現が、現代社会の一つの要望、これを、一つの淘汰圧とみなせば、それに形態から適応分化したのだといえるかも知れない。しかし、イヌと人間との間の親密な関係を語るいくつかの現象の中には、文学者の見事な表現で行動的な適応（こうい切るには抵抗があり、愛着というべきだともいえる）例が知られている。

筆者は、人間的な、擬人的といえる愛着という表現で相互関係を表すのが不適當だとはいえないし、科学的には適応といっても、科学的視点からは適切だとも思う。だが、人間的な表現では安易すぎるし、適応からもう一步進んだ表現が欲しい。また、それは知能的ではあるが、知能的行動と一般化してしまうのとは別の結びつき方を問

いたいのだ。最も確かなのは、同種内の緊密な個体間関係、協力関係に近い異種間関係であるということである。共生関係そのものではないが、ややそれに近い。しかし、イヌが飼育され人間との間に歴史的に形成された性質なのであろうから、これを独特の進化だと言えよう。

イヌの側には、その心理的、ひいては行動的・生態的な変化を経て来ているはずである。

とりとめのない話になったが、要するに筆者はこうしたイヌの世界の特殊性について知りたいと思いながら、それがまだ殆ど判っていないことを指摘したかったのである。

というのは、少し散文的になるが、イヌの側からの人間観や社会観を知りたいということである。というのは、人間がその文明を発達させて、人工的世界（環境）をつくり出して、それに適応するように文化を発達させて来たように、それに対応したイヌの世界があり、それを知りたい。そして、イヌのこのような面を知ることはまた、人間観に比較によって反映されて行くだろうからでもある。人間が人工的世界を物質生産を中心にして作り出している文明が、ヒトとして「自然な」のか、という私の年来の追究のテーマと深く関わっている。

動物学的には、イヌの「世界観」を知りたい上に、イヌが人間界の中で文化「化」（？）して行く過程を追究してみたいと考えている。何度か書いているのだが、家畜動物を知ることによって人間の比較を深めて、人間（ヒト）の特性を知るのに役立つだろうし、人為環境、あるいは社会の中で種を維持している点で、家畜は人間に近い動物である。中でもイヌは人間に最も近縁な動物であり、この点で類人猿の比ではないといいたい。但し、決して非科学的・情念的にイヌを「祭り上げる」のとは違う。未発見の科学的分野を仮定した想いであり、仮説なのである。

なお最近の筆者の人間観について『現代ホモ・サピエンスの変貌』（朝日新聞社刊・2000.8）をどうぞご参照下さい。

《筆者紹介》（小原秀雄著『現代ホモ・サピエンスの変貌』を参考にした）

1927年東京に生れる。法政大学文学部中退。国立科学博物館助手、女子栄養大学教授（動物学・人間学）を経て、女子栄養大学名誉教授、日本環境会議代表理事、国際自然保護連合（IUCN）種の保存委員会顧問、国際哺乳類学会北東アジア代表委員ほか。

《主な著書》

『日本野生動物記』（中央公論社）、『哺乳類』（岩波書店）、『ペット化する現代人』（共著、日本放送出版協会）、『人（ヒト）に成る』（大月書店）、『生物が一日一種消えてゆく』（講談社）ほか多数。